

O1-003

小豆島の保育施設における乳幼児の突然死に対する認識と対策の現状調査

原田 こと葉^{1,2}、富田 理絵¹、山本 真由美¹、
日下 隆²¹小豆島中央病院 小児科²香川大学 小児科学講座

【目的】

乳幼児の予期せぬ突然死 (Sudden Unexpected Death in Infant : SUDI) は1歳を超えると発生率が低下する。一方、保育施設内で発生する SUDI は1・2歳児が多いことが指摘されている。保育施設内で1・2歳児であることが SUDI のリスクになる可能性を受け、保育従事者が安心して働ける環境を目指して現状把握を目的としたアンケート調査を実施した。

【対象と方法】

小豆島にある20の保育施設を対象に、SUDI に関する教育の機会等についてアンケートで調査した。190名の保育従事者を対象に、午睡見守り時の注意内容や SUDI の危険因子として認識している要素等を無記名アンケートで調査した。

【結果】

回収率は施設からが95.0%、保育従事者からが83.7%であった。SUDI に関する教育の機会を定期的に設けていた施設は5.3%、蘇生法講習の機会を定期的に設けていた施設は15.8%であった。保護者と SUDI について情報共有を行う機会は73.7%の施設で一度もなかった。仰向け寝の徹底は0歳児担当者の76.7%でなされていた。1・2歳児担当者では39.6%であった。定期的な姿勢と呼吸の観察は0歳担当者で96.7%、1・2歳担当者で姿勢の観察は96.2%、呼吸の観察は86.8%でなされていた。呼吸を触れて確認している保育従事者は0歳担当で46.7%、1・2歳児担当で26.4%であった。触れることによる覚醒刺激を実施していた0歳担当者は13.3%、1・2歳児担当者は7.5%であった。SUDI の危険因子については、0歳児であることは81.6%、1歳児であることは71.7%が危険因子と認識していた。2歳児であることを危険因子と認識していたのは47.8%であった。うつ伏せ寝に関しては、0歳児のそれは96.6%、1歳児のそれは87.0%、2歳児のそれは69.1%の保育従事者が危険因子と認識していた。登園開始初日の危険認識を示した保育従事者は42.0%、登園から1ヶ月以内に関しては32.6%であった。保育従事者の67.3%が教育の機会の不足を感じていた。

【考察】

SUDI対策として保育従事者への十分な情報提供が不可欠である。その上で0歳児に対する仰向け寝の更なる徹底、3歳未満児への目視での定期観察にゆるやかな覚醒刺激を加えること、そして登園開始1ヶ月以内の危険認識の向上を図ることが予防に繋がると考える。保育施設内の人材は限られており、保護者の理解と協力も必要である。保育施設と保護者が、SUDI という疾患やその予防策について情報共有し連携を図っていくことが重要である。

O1-004

保育施設実習中における感染対策の現状—実習中の学生の調査より—

佐野 葉子

東京福祉大学社会福祉学部 保育児童学科

【はじめに】

保育施設において、子どもの健康増進と疾病等への対応とその予防は、保育所保育指針に基づき行われている。保育施設で問題となる主な感染症の感染経路には、飛沫感染、空気感染、接触感染、経口感染などがあり、感染症を防ぐには、感染源、感染経路、感受性への対策が重要である。保育施設の職員は、これらについて十分に理解するとともに保育施設における日々の衛生管理等に活かしていくことが必要であるが、実際にはすべての保育施設が十分な感染対策を講じているとは言えない現状がある。今回保育士養成校の学生が保育施設に実習に行った際、感染対策に関してどのような対応をとっていたのか明らかにする事を目的とし研究を行った。

【方法】

対象は、保育士養成校の学生である。研究方法は、無記名の調査票を作成し対象者に研究の目的を研究者が口頭で説明し、同意が得られた人に回答してもらった。

【結果】

対象者は4年制大学の3年生と4年制で、ほぼ全員がおむつ交換や排泄の援助を行っていた。しかし8割以上の学生が、その援助の際にグローブなどの感染防御策を行っていないことが明らかとなった。また同様にトイレ掃除も素手で行っていた。しかし嘔吐物に関しては、グローブの使用が義務化されている施設が多かった。血液に関しては、接触した経験は半数ほどであったが、排泄の援助と同様に素手で援助していることが多かった。

【考察】

今回の調査より保育施設においては、感染対策が十分でないことが明らかとなった。特に嘔吐物よりも血液を素手で触る機会が多かった。厚生労働省の「保育園における感染対策マニュアル」では、保育施設における感染に関して詳しく述べられており、特に血液の感染について知識の習得が必要であると書かれている。保育施設においては、転倒や怪我によるすり傷や鼻出血は日常的にみられる。また、おむつ交換時の排泄の援助も毎日行われている。おむつの取り替え時、特に排便時にはグローブを装着しても、血液は素手で扱うという対応も見られた。血液も便や嘔吐物のように病原体が潜んでいる可能性を考え、素手で扱わない習慣や、血液や体液に防護なく直接触れてしまうことがないように工夫することが必要であると考えられた。子どもや保育者を感染から守るために、学生に対し感染に関する正しい知識と技術の普及を行うことが急務であると考察された。